

第35回 令和8年度 全国地域包括・在宅介護支援センター協議会

全国地域包括・在宅介護支援 センター研究大会（石川大会）

2040 年への岐路に立つ地域包括ケア
～地域包括・在宅介護支援センターの備えと実践～



開催期日：令和 8 年 9 月 29 日（火）・ 30 日（水）

全体会・分科会：TKPガーデンシティPREMIUM 金沢駅西口（石川県金沢市）

情報交換会：ホテル金沢

主 催：全国社会福祉協議会 全国地域包括・在宅介護支援センター協議会

共 催：東海・北陸ブロック地域包括・在宅介護支援センター協議会
石川県地域包括・在宅介護支援センター協議会

後 援：厚生労働省 石川県 金沢市

全国老人福祉施設協議会 全国老人保健施設協会 日本医師会 日本介護支援専門員協会
石川県社会福祉協議会 金沢市社会福祉協議会
石川県医師会 石川県老人福祉施設協議会 石川県デイサービスセンター協議会
石川県老人保健施設協議会 石川県看護協会 石川県社会福祉士会
石川県介護支援専門員協会 石川県歯科医師会 石川県薬剤師会 石川県介護福祉士会

第1分科会

実践事例発表



第 1 分科会

〔実践事例〕

頁

- | | | |
|---|--|-----|
| ① | 2040年に向けた相談体制づくりへの挑戦
流山市南部地域包括支援センター 早川 仁 氏 | 107 |
| ② | 家族介護者支援を地域で創造する
三島北地区地域包括支援センター 齊藤都子 氏
松月美由紀 氏 | 115 |
| ③ | ゴミ屋敷事例の独居高齢男性から学んだこと
光明荘地域包括支援センター 宮地結美子 氏 | 121 |
| ④ | 地域から学び、人と地域を診る包括へ
橿原市地域包括支援センター北エリア 辻井克哉 氏 | 129 |
| ⑤ | 相談業務での法定外業務の判断モデルの検討
グリーン在宅介護支援センター 柳沢 玄 氏 | 137 |
| ⑥ | 身寄りのない高齢者の支援を考える
別府市朝日地域包括支援センター 大鶴真弓 氏 | 145 |
| ⑦ | 健康寿命延伸へ「フレイル外来事業」
南あわじ市地域包括支援センター 中田凌也 氏 | 153 |
| ⑧ | AIを用いた地域課題抽出の有用性について
千歳市在宅医療介護連携支援センター 吉田肇 氏 | 161 |

家族介護者支援を地域で創造する ～委託型包括を超えたミッション～

三島北地区地域包括支援センター 齊藤都子・松月美由紀

1. はじめに

社会福祉とは「ふつうのくらしの幸せ」を追求する学問であり、地域包括支援センターは、その最前線で住民の生活の安定と福祉の増進を支える責務がある。社会福祉における実践理論に基づけば、私たちが解決を模索する社会構造的な問いは、個人の病理に帰結するものではなく、社会のあり方そのものに根ざしている。したがって、解決策もまた社会的方策として、地域福祉の実践という形で具現化していく力が求められる。家族介護者支援においても、単なる介護負担の軽減というケアの視点だけでなく、介護者の人生そのものを支える視点が不可欠であり、それは虐待やセルフネグレクトの未然防止につながる。本稿では、三島北地区における5年間の試行錯誤を経て、新たな地域連携モデルである『三島モデル』がいかにして確立されたのか、その実践の軌跡をここに報告する。

2. 三島北地区における挑戦 実践と研究のアプローチ

三島北地区地域包括支援センターは2019年10月に開設された。機能強化事業として、2020年より2024年までの5年間、私たちは「家族介護者支援を地域で考える」をテーマに、順天堂大学保健看護学部と共同でシンポジウムを開催してきた。この歩みは、単発的なイベントの集積ではない。シンポジウムやイベントを通じて参加者間で語り合い、関係性が構築されるプロセスを重視してきた。また、「老老介護」「ヤングケアラー」「難病の方を支える家族支援」「認知症の方を支える家族支援」など、当事者の語りから学び、順天堂大学との共同研究・研修企画を通じ、アンケートやインタビュー調査を積み重ねた。このプロセスにより、地域の課題を客観的かつ学術的に分析し、実践にフィードバックする体制を構築した。

現場では、就労世代が抱える「介護と仕事の両立」の困難に加え、要介護者への対応と自身のケアとの間で生じる家族間の複雑な葛藤に直面している。こうした課題は介護者一人で解決できるものではなく、多角的な視点から状況を整理し、地域全体で包括的に支え合う体制を築くことが不可欠である。

2024年のシンポジウムにおけるアンケート調査（順天堂大学保健看護学部 鈴木江利子 岡本紗季）によると、住民の参加動機として「親の介護への不安から知識を深めたい」「実体験の語りを聞きたい」といった切実な願いが寄せられた。専門職からは「家族介護者の言葉には重みがある」「支援者の立場では気づけなかった視点が得られた」といった共感の声が多く、専門職として自身の支援を再考する機会となったことが示唆された。

また、同分析から抽出された地域課題（順天堂大学保健看護学部 榎本佳子）としては、認知症高齢者への理解促進や地域住民が求める見守り体制の整備をはじめ、介護者が限界に達しない社会的な仕組みづくり、悩みや不安を吐き出せる相談の場の確保、そして効果的な情報発信の5点が、地域の喫緊の課題として示された。これらの知見は、シンポジウムやイベント等の場を通じて、地域住民や保健医療福祉関係者と対話を重ねるプロセスが極めて重要であることを示唆している。

3. 実践の深化『みしま・ミーツ・アップ』の創造

2025年から新たに5年間は、「家族介護者支援を地域で創造する一機能をつくる」をテーマとして掲げた。これまで蓄積された分析結果を「目に見える地域福祉の仕組み」として定着させ、次なる展開に発展していく。

本モデルの独自性は、地域包括支援センターを軸に、企業、専門職、ボランティアが有機的につながる「多層的な連携体制」を構築した点にある。特に、大学との共同研究を通じて得た学術的エビデンスを実装する姿勢は、既存の枠組みを超えた独創的なアプローチである。課題解決のプロセスを展開させるこの仕組みこそが「三島モデル」であり、確かな実践の質を生み出している。

この新たな段階において、シンポジウムとイベントを一体化し、2025年に『みしま・ミーツ・アップ』という地域ブランドを確立した。2024年から会場には350人以上の入場者が訪れ、130人を超えるボランティアが運営を支えた。このネットワークは、単なる協力関係を越えている。住民ボランティアをはじめ、病棟看護師や在宅訪問看護師といった医療職、居宅介護支援事業所の介護支援専門員、市内全域の地域包括支援センター職員、医療・福祉・障害分野の支援者、食品会社や民間業者に至るまで、委託型包括の枠を超えた多岐にわたる分野の協力体制が構築されている。

イベントの構成は、1) 弁護士や公認心理師らによる「ちょっと相談」、2) 福祉用具や企業等のノウハウに触れる「新しい発見と体験」、3) 地域住民や支援者が集う「出会いのコミュニティ」の3本柱からなる。これは、地域包括支援センターが抱える相談業務という「委託型」の枠組みを大きく超え、専門職と地域住民がフラットに対話し、互いに支え合うネットワークを促進するための場である。

4. 成果と考察

本モデルは、シンポジウム等の場を通して抽出された地域課題に対し、多職種が共に向き合うことで単なる知識の伝達を超えた実践的なIPE（多職種連携教育）を実現するものである。職種を超えた対話は相互理解を深め、多角的な視点の共有を促す。この共創的な実践を通じて地域の連携基盤が強化されることは、専門職が支援への意欲を維持・向上させるための「支援者支援」としても重要な意義がある。三島モデルでは、参加者一人一人が、自らの地域を創造していく当事者意識を持ち、対話を重ねていく過程そのものが、地域に新しい機能を生み出している。

5. おわりに

三島モデルから実現化した企画として、社会保険労務士やライフプランナーとの共同企画による「介護が始まる前のライフプラン」セミナーや、介護を終えた家族を支援する「あんさんぶる」サロンを、地域の喫茶店と連携して定期開催している。今後も既存の枠にとらわれない自由な発想で、家族介護者支援を地域で創造する「三島モデル」を発展・変化させていきたい。包括支援センターの新たな可能性を切り拓くべく、さらなる挑戦を続けていく。

機能強化事業「家族介護者支援を地域で考える」から「地域で創造する」へ転換

三島北地区地域包括支援センターでは、順天堂大学保健看護学部との共同研究を通じ「家族介護者支援を地域で創造する」取り組みを実践している。家族介護者である当事者の語りを中心としたシンポジウムとイベントを一体化し、ブランド化した「みしま・ミーツ・アップ」の展開により、多職種・企業・住民が協働する重層的ネットワークを構築した。さらに、この場から介護が始まる前の家族支援「ライフ・リンク・サポート」や、介護が終わった家族のサロン「あんさんぶる」などが生まれた。

今後も委託型の枠組みを超え、介護者本人の人生を支える地域支援「三島モデル」のチャレンジを続けている。

1. 静岡県三島市の紹介

【三島市の歴史】

静岡県東部に位置する三島市は、古くから伊豆国の国府が置かれ、東海道の宿場町「三島宿」として発展してきた歴史豊かな地域である。市内には富士山の湧水群が点在し、豊かな自然環境と歴史的風情が共存している。

交通の要所として新幹線三島駅を有し、首都圏へのアクセスも良好であるため、ベッドタウンとしての機能も併せ持っている。また、街の中心には伊豆国一の宮である三島大社が鎮座し、年間を通じて多くの市民や観光客で賑わいを見せている。



三嶋大社大祭りポスター

【人口・高齢化率】

三島市の総人口は約 104,401 人となっている(令和 7 年 3 月 31 日基準)。このうち、当センターが管轄する三島北地区の人口は約 20,296 人、65 歳以上の人数は約 5,635 人であり、高齢化率は約 27.8%である。

世帯構成の特徴としては、独居高齢者世帯が約 17%、高齢者のみ世帯が約 11%を占めており、単身および高齢者のみの世帯への継続的な見守りや包括的な生活支援体制の整備が喫緊の課題となっている。

当センターは、2019 年 10 月に開設された。JR 三島駅南口から徒歩 5 分、1 階に安くて評判の八百屋が入るビルの 2 階にオフィスを構えている。住民にとって立ち寄りやすく、生活に密着した拠点となっている。

三島市内は中学校区等を基本として 6 つの地域包括支援センター(三島北地区、三島南地区、錦田地区、北上地区、中郷地区、山田地区)に分かれている。



【圏域の特徴・地域特性】

本圏域の高齢化率は約 27.8% (市全体 約 30.9%) と全包括で最も低い。単身や夫婦のみの高齢世帯が多い。歴史ある寺院が多く点在し、三島大社の大祭りで強く団結する地域がある一方、近所付き合いが希薄で課題が見えにくい地域も混在する。

高齢化率の低さに反してケアマネジメント契約数や総合相談件数は非常に多く、特に精神科医療との連携相談や生活保護受給者の対応相談が多い点が大きな特徴である。多様な地域性と複雑化する課題に対応するため、医療や多機関との重層的な連携体制の構築が求められている。

2. 委託型の機能強化事業「家族介護者支援を地域で創造する」の軌跡

【順天堂大学保健看護学部と共同研究・共同企画】

当センターでは、2019 年の開設以来、地域包括支援センター機能強化事業の一環として「家族介護者支援を地域で考える」をテーマに掲げ、順天堂大学保健看護学部との共同研究・共同企画に取り組んできた。2025 年からは「地域で創造する」へ転換している。図 1 は機能づくりの展開を示す。当事者の語りを中心に据えたシンポジウムを毎年継続開催し、学術的分析から地域課題を抽出して実現化するプロセスを展開させている。

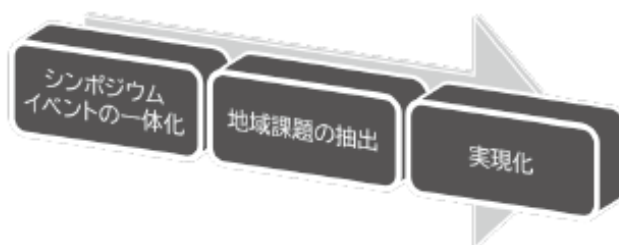


図 1 「考える」から「創造する」機能づくりの展開図

【多職種・多機関・企業の参入とブランド化「みしま・ミーツ・アップ」】

地域のケアマネジャーや、病棟看護チーム「ここいき三島」などの医療職と協働したほか、福祉用具業者・配食会社・食品会社等の多様な民間企業が参入した。2024年からはシンポジウムと体験型イベントを一体化させ、2025年には「みしま・ミーツ・アップ」という地域ブランドを確立した。会場には350人以上が来場し、130人を超えるボランティアが運営を支える、枠を超えた重層的ネットワークが構築されている。



みしま・ミーツ・アップ 2025 チラシ

【活動実績 2020年～2026年】

★令和2(2020)年～令和6(2024)年「家族介護者支援を地域で考える」

令和2(2020)年「ケアマネジャーが感じる家族介護者支援の課題」研究

「家族介護者支援の専門職連携教育」研修会

令和3(2021)年「難病の方の家族介護者支援」研修会

令和4(2022)年「ヤングケアラーの支援と課題」研修会

令和5(2023)年「老々介護を終えて」シンポジウム

令和6(2024)年「認知症の母の介護を終えて」シンポジウムとイベント

★令和7(2025)年～「家族介護者支援を地域で創造する」

令和7(2025)年「認知症の夫が教えてくれた未来」シンポジウムとイベント

「みしま・ミーツ・アップ 2025」ブランド化誕生

令和8(2026)年「ヤングケアラーと地域のこれからを考える」

3. 実現化した取り組み内容

【介護が始まる前の家族支援「ライフ・リンク・サポート(生活をつなぐネットワーク)」】

40～60代の就労・子育て世代をターゲットに、社会保険労務士やライフプランナー、行政書士、介護支援専門員と連携し、介護離職の防止や仕事との両立に向けた事前のライフプラン個別相談やセミナーを開催している。

【介護を終えた家族支援サロン「あんさんぶる」】

施設での看取りや在宅介護が終わったあとに喪失感・孤立感を抱えるご家族と、気にかけるケア職員らの声を受け、センターから徒歩2分の喫茶店を舞台に企画された。語り合える場がなかった人々が同じ経験を持つ仲間と出会い、「ひとりではない」と感じて前を向く力を取り戻す場を目指している。「あんさんぶる」には、異なる歩みを持つ一人ひとりが調和し、あたたかなつながりのハーモニーを奏でていくという願いが込められている。

【子育て・働き世代との共同企画】

「NPO法人みしまびと」とコラボ企画として「みしま・ブルーム・フェス」多世代イベントへ参画。ネオ農兵節を地域住民や訪れた参加者と踊るなどして「ホーカツ」の存在を知っていただく機会となった。そこで出会った人たちとは、未来の介護について会話が広がっている。

【新聞記者との出会い】

当センターの取り組みに興味をもった地元の新聞記者との出会いがあった。一日包括の仕事体験してもらい、その様子をルポ記事として発信していただいたことを機に、積極的な情報発信を展開。包括支援センターの認知度向上と、気軽に相談につながる窓口づくりを進めている。



静岡新聞社 社会部 大橋弘典 記者

4. 私たちの思い

三島北地区地域包括支援センターは、住民の皆様から「この地域は三島北ホーカツに任せれば大丈夫。安心して暮らせる」と信頼され、愛されるセンターであり続けたい。行政の委託型包括という枠組みを超え、大学・専門職・企業・住民と共に創り上げてきた私たちの実践は、介護者本人の「生活」と「人生」を地域で支える『三島モデル』へと進化した。私たちの枠を超えた「地域の力」の大きさを、今あらためて強く実感している。